

KTK ひゅうまん 京都

No. 533 2021年4月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者／池添 素 電話&FAX(075)465-4310 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

- P.1 左大文字 つどめ
- P.2 常任委員会から 池添 素
- P.3 随感随筆『天道虫、とんだ!』 大西里江
- P.4 血の染みついたバトン 中村 暁
- P.5 障害者と共に歩んだ京障連の50年 松本 美津男
- P.6 天に向かって伸びる! リフト機能 ライスチョウジョナ
- P.7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P.8 2+2=詩 赤富士文兼
- P.9 障害のある人の権利を守る北障連から 濱中 博
- P.10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P.11 知っ得情報 松本 美津男
- P.12 力を合わせて生きる 金 順喜

左大文字

「名言奇言」

最近上梓した『男が介護する』の担当編集者からのメール▲あの斎藤美奈子が「週刊朝日」最新号(4月16日号)の「名言奇言」欄で拙著『男が介護する』を取り上げている、というのだ。え、なんで? 斎藤さんが? ▲私が斎藤さんを意識しだしたのは、これもまた癖の強い切れ味鋭いエッセイで知られた米原万里さんに触発されたせいだ。米原さんは2006年に56歳で逝去した作家・エッセイストだが、ロシア語の同時通訳でも知られた人だ▲その米原さんが書評を連載していた週刊文春「私の読書日記」で、斎藤さんのことを度々話題にしていた。これらは米原さん逝去後に刊行された『打ちのめされるようなすこい本』に所収されているが、米原さんは言う。「私など自分の本が売れない不幸より、斎藤に酷評されない幸運を噛みしめる」▲「直接的な面識はない」(斎藤『本の本』)という二人だが、互いにリスペクトし合っていたのだろう、米原『嘘つきアーニヤの真つ赤な真実』、斎藤『読者は踊る』、それぞれの文庫版の解説を担当し合っている仲でもある。斎藤本の米原解説のタイトルが「最強無敵の毒舌評論家による書評本を解説する恐怖」と、実に大仰で笑った。そんな縁から私もついには「彼女の毒舌禁断症状に苦しむ」(米原はめになったのだ)▲そんな彼女が週刊朝日で拙著を書評しているというのだから、驚いた。編集者のメール添付Fを恐る恐る開けてみて、また驚いた。書店に急いで、全部(3冊だが)買い占めた。

つどめ



「卯月」
渡辺あひる

常任委員会から

〈タテのバリアを突破〉

ライスコウジョナさんが5年前、原告として司法の判断を求めて立ち上がった裁判が、勝訴という嬉しい結果となりました。詳細は6ページに原告自身が裁判結果と気持ちを熱く綴ってくださっています。本紙では、弁護団が裁判にかける思いを書いてくださいました。いろいろな角度からこの裁判のもつ意味を学びながら、裁判を応援できたことを嬉しく思います。ジョナサンが問題提起して求めたタテのバリアフリー化は、これまで横や面でのバリアをなくすところが運動の中心だったところに一石を投じた大切な内容です。裁判所の判断を京都市が控訴しなかったことで、勝訴が確定しました。次はこの成果を広く発

信する仕事が残っています。連載は続きます。

〈個別サポート加算?〉

児童発達支援事業の2021年度に出された報酬改定の中に、個別サポート加算ⅠⅡなるものが組み込まれました。それも3月31日に厚生労働省から通知が来るというひどいもの。新年度に必要な重要事項説明書に盛り込まなくてはいけない内容なのです。その内容は、子どもや保護者の人権や尊厳を傷つけるものです。個別サポートⅠは、ケアニーズの高い障害児への支援で、加算をつけるために5領域11項目の膨大な調査を

か疑問です。個別サポート加算Ⅰは、虐待等の要保護要支援児童を受け入れた場合の加算です。しかし、加算の申請には、保護者の同意や個別支援計画への明記が必要で、さらに加算への負担は保護者が支払うという、現実性のないものです。このとんでもない加算についての意見を厚生労働省にあげていこうと思っっています。

〈進まぬワクチン接種〉

新たに感染を広げているコロナ変異株は、年代に関係なく強い感染力を持つっていると報道されています。近くの大阪府での日に日に膨れ上がる感染者数は、京都にも影響は必至です。そしてワクチン接種はめどが立たず、高齢者でも何の連絡も来ていないのが現実です。医療職や介護職への接種は急務ですが、それもめどが立っていません。日本製のワクチンがなぜ開

発されないのか不思議に思います。日本の研究技術をもってすればできないことはないと思います。が、政府の研究開発への軽視の結果ではないでしょうか。後手後手の国や地方自治体の姿勢はますますの感染を拡大させます。

〈メーデーにご参加を〉

5月1日は土曜日です。昨年は中止でしたが、今年は感染対策をして、都大路を歩くことになりました。屋外ですから、大いにアピールしましょう!しかし、これまでも同じではありません。まず、社会福祉会館がなくなり、(高級ホテルになるそうですが)集合場所もかわります。集会は10時から10時45分、京障連の参加枠は5人です。デモの人数制限はありませんが、シュプレヒコールは無し。堀川通竹屋町角に集合です。

池添素(京障連事務局長)

随感随筆『天道虫、とんだ!』大西 里江

三月春泥

昨夜は春の嵐。

朝、足元を見ると、

ミミズが引かれている。

土の上なら土の中に避難出来たのに…。

このアスファルトまで、何処からきたのか？

よく見ると少し離れて、また引かれていた。

空を見上げると、

梅から桃そして、桜が咲き出して。

雨に洗われた木々の葉は、雫で光っている。

新たな生気を得たように、輝いている。

川沿いに、白ヤナギ、コデマリ、馬酔木、ボケの花、

色鮮やかになって、咲いている。

沈丁花は、雨上がりで香りを増している。

川は水嵩が増し、鴨たちはスイスイと泳ぐ。

昨夜は、何処に避難していたのかな。

子供鴨が、親鴨の後ろを一生懸命についていく。

「ホーホケ、ホホーケ、ククク」

春を告げる鳥、ただいま、練習中。

春告鳥、春は待ち望む季節。

たった一晩で、潤うもの、失うもの。

自然の中に存在する。

弱いもの、力がないもの、自助だけではとても厳しい。

それが、自然の摂理。

人は、何とかして守ろうとする。

守る為にどうしたらいいのか？考える。

予防することが出来ないか？悩む。

大災害でも何とか予防出来ないかと、整備する。

自助では厳しいことを、共助、公助、互助で何とかしようとする。

共に助け合うとする。

共助出来る社会であって欲しい。

逃げられないなら、安全な所にいられるように。

動けるなら、安全な所を作れば良い。

皆が安全な所で過ごせるのが良い。

考える輩。

どんなが起こっても、安心して暮らせること。

人を区別することなく、平等に命を守ること。

私に何が出来るかではなくて、出来ることをやってみよう。

自助だけで生きられる人だけが、安全な暮らしが出来る社会ではなくて、

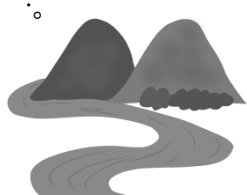
共助し、互助に頼らない充実した公助がある社会になることが、

皆が安全に暮らせる社会と思う。

命を奪う雨は嫌です。

命を潤う雨がいい。

芽吹いた命を優しく見守りたい。



血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

④義務としての社会保障

開会中の通常国会には医療制度に関する法案がいくつか提出されていて、その1つに「全世代型の社会保障制度を構築するための健康保険法等の一部を改正する法律案」がある。この法案に後期高齢者医療制度（原則75歳以上の人が加入）の窓口一部負担金への2割負担導入が盛り込まれている。現在の仕組みは1割負担が基本、「現役並所得」（単独世帯なら年収383万円、夫婦2人世帯の場合は年収320万円）が3割負担。それに加えて課税所得28万円かつ年収200万円以上の人に「2割負担」を求めようというのである。

深刻化させかねない負担増を、この時期に提案するセンスのなさにあきれるが、ここで考えたのは背景にある思想の陳腐さである。法案は題名に「全世代型の社会保障」を冠されているように、安倍が2019年に立ち上げ、2020年末に菅が「方針」をとりまとめた「全世代型社会保障検討会議」の議論を踏まえたものだ。

「方針」冒頭、「菅内閣が目指す社会像は『自助・共助・公助』として『絆』である」、「まずは自分でやってみる」、「家族や地域で互いに支えあう」、「最後は国が守ってくれる」というような社会を目指している」と書いている。こんなデータラメを政策文書に書いて恥ずかしくないのか。心底くだらない言葉遊びである。

その上で、「我が国の未来を担うのは子供たち」なので、少子化対策を「大きく前に進める」。一方で「団塊の世代が75歳以上の高齢者になり始める」「現役世代の負担上昇を抑えることは待たなしの課題」とある。子どもと高齢者を対比的に扱う記述から彼らの本音が読み取れる。すなわち国家にとって少子化は存続にかかわる一大事だが、高齢者の医療・福祉に税金を注ぎこんでも国家に何ら得はない。

だが負担増は「お年寄りに冷たい政府」だとの批判を招く。それは国としてもできれば避けたい。そこで持ち出されるのが「現役世代の負担上昇を抑える」という理屈。つまり彼らは、みなさんの負担を増やすために高齢者の負担を増やすのですよ、と説明すれば国民は納得するはず

だ、と考えているらしい。幼少期から高齢期に至るまで、あらゆる生活の場面で、人の生命・健康を守る義務を国は負っている。それを果たさせるのが社会である。そんなことすら忘れて、自助だ共助だと言葉遊びにうつつを抜かし、挙句に世代間対立を煽って批判を抑える。負担増の背景にある彼らの程度の低い思想に眩暈が止まらないが、これが私たちの乗り越えるべきものである。



障害者と共に歩んだ京障連の50年(4)

京障連代表委員 松本 美津男

副知事・助役出席の要求交渉

1975年、116項目の統一要求書に基づいて対府市交渉

を行いました。

この交渉には京都府は副知事、京都市は助役が出席して

11月、京都府の副知事との交

渉には31団体180名、先立つ

10月、京都市の助役との交渉は

28団体123名が参加しており、この時の交渉が規模においては最大のものでした。

(エピソード)

長い間在宅生活をしていたKさんがこの交渉に少し遅れて参加し、松尾副知事がしゃべっているのも気にせず、後ろの方で知り合いの人に大きな声で丁寧

に挨拶している場面はなんと面白い情景でした。

余談ですがKさんは純粋な京都弁を話し、電動車いすの交付を受けてからは、夜な夜な徘徊

しているとの噂が流れるほど活発に外出するようになりまし

た。



府政市政ともに自民党中心の首長に変わってしまいましたが、そうした中でも、京障連はねばり強く運動を続けてきました。京都府・京都市に対する要求書を2010年頃までほぼ毎年提出し、交渉で切実な要求の実現を迫ってきました。

こうした中で施設・養護学校の増設や障害者医療無料化、自治体

への障害者採用試験、住宅改造助成、タクシー料金の補助、共同作業所への補助など数多くの要求を実現しています。

京都障害者白書を刊行

1983年、障害者の実態を総合的に明らかにした「白書」をまとめる必要性を感じ、京障連と全

障研京都支部が呼びかけ団体となり、京都府職員労働組合福祉労働支部、京都市職員労働組合民生支部、京都教職員組合障害児教育部、日本社会福祉労働組合京都支部などに参加を要請し、また大学の研究者たちにも協力を依頼し

て、14名からなる京都障害者白書刊行委員会を発足させました。

て、14名からなる京都障害者白書刊行委員会を発足させました。

刊行委員会は十数回の会合を重ね、1984年8月、本文419

ページ、補足資料13ページという分厚い京都障害者白書を刊行しました。

価格が3000円と少し高めでしたが、多くの人に普及することができました。

1993年4月には旧版では取り上げられなかった精神障害者の問題と京都北部の実態と運動なども取り上げたため更に分厚い新版

京都障害者白書を刊行しました。



天に向かって伸びろ！リフト機能

ライスチョウジヨナ

2021年3月16日、ついに裁判の判決が出ました。結論から言うと、5年続いた戦いに勝訴いたしました！

正確に言うと、リフト機能に関しては勝訴し、ネックサポート部分に関しては残念ながら認められず、あくまでも「一部勝訴」という形になりました。しかし、ヘルパー等に全てを委ねることは適切ではなく、可能な限り自身で行う必要がある。腕を上げる動作においても、無理に腕を上げたりすると身体に負担が生じる。以上の理由によりリフト機能は必要。

リフト機能に関して裁判所が必要性を認めた理由は次のとおりです。

①医学的な必要性について

原告は筋力の低下により、頭腕を上げたり、被写体を観察す

②就学上の必要性

原告は美術系の大学に通っていたため、絵を描く授業では、より広い範囲に絵を描くために

る角度を変えたりする必要があったため、就学上リフト機能が必要であったと言える。

文字数の関係でぎつくりと説明するとこんな感じですが、判決文を読むと、裁判所はかなり丁寧にリフト機能の必要性を拾ってくれたことがわかる良い判決文でした。ただし、ネックサポート



が認められなかったのは極めて残念でした。より具体的な解説やネックサポートに関する説明は次回執筆する先生に「丸投げ」したいと思います。

この5年間、京都市と戦い、また時には裁判長とも戦うという、1対1ではなく1対2とも言える熾烈な争いを繰り広げてきました。実はこの裁判長、一部では「氷の女王」と言われているほどの冷たさを持った猛者。裁判が終わり、最後の僕の意見陳述での熱弁がその氷を溶かしたんだと言われましたが、情に流される裁判長だとも思えないので、僕としてはどちらかと言うと、その氷をピクで崩したという感覚です。

そして今まで傍聴に来ていただいたり、応援してくださいました皆様には本当に心より感謝いたします。皆様の応援があったからこそその勝訴であることは間違いありません。今後ともよろしくお願いたします。

つれづれあらぐさ

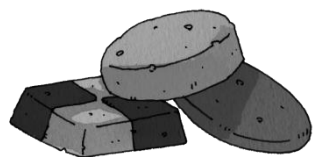
あらぐさ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

場面⑩ 誕生日、

50代の始まりに思う

4月生まれの彼は、グループホームで生活しながらあらぐさに通所しています。製菓作業を主に、掃除や納品等にも取り組んでいます。メーカーの名前やロゴマークが好きな彼は、小さい頃にスパーでお母さんから「好きなもの持っといで」と言われると、いつも「にっしん(日清)」と言いつつ小麥粉の袋を持ってきたそうなんです。そんな彼が大人になって、小麥粉を材料にクッキーやケーキを作っているというのは、不思議なめぐり合わせを感じます。

就職してしばらくした頃、彼から「すずき」と呼ばれるようになりました。送迎や活動でスズキの軽自動車を運転しているからだだったようです。運転がうまくない自分は、ずっと軽自動車にだけ乗っていました。その後、覚悟を決めて10人乗りのワゴンに乗るようになるのですが、「にっさん(日産)」と呼びかけられることはなかったです。名前を尋ねると、「中山さん」と覚えてもらっていました。ケーキの生地混ぜやクッキーの生地丸めに黙々と取り組んでいる印象の彼でしたが、最近は今までに見なかつた意外な行動をとるようになってきました。詰め替え用の液体洗剤袋の真ん中をわざと切ろうとアピールして、職員をからかって楽しんでいられるのです。納品に出かけるのが分かれると声をかけられるまで職員の前を行ったり来たり、事務室にいるお気に入りの人に会いたい一心で理由をつけて販売に来たりという姿もあります。また、作業中だけでなく感染防止ですつとマスクをするのは難しいと思っていました。彼は、今、グループホームの世話人さんがミシンで作ったマスクを毎日つけています。



80代後半のご両親は、彼の自宅帰省について「たまに帰ってくるだけでも疲れる」と話されます。「長生きしたいけど、いつまで見られるか」「が一番の心配」「(両親の)どつちかが欠けたら無理なので、いつまで見られるか」「親が見られへんようになつたら、グループホームでは見てもらえへんから」と、悩みが続きます。ご本人が生まれた時の思い、育てる中での苦勞、グループホーム入居を決めた時の迷い、将来の葛藤：毎年、「今年は見られたなあ、来年はどうかなあ」と話しているというご両親。環境や家族の変化を受け入れながら「自分の生活」を送っている彼の50代が、これから始まります。

中山 恵美子(あらぐさ福祉会)

2+2 詩

「生きていると」

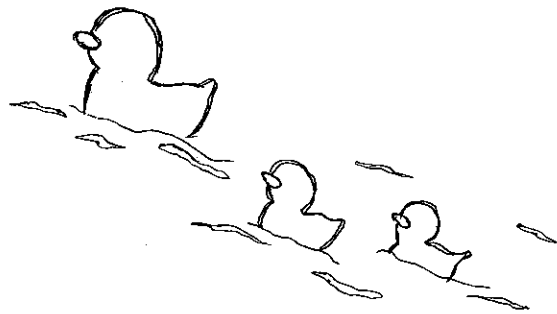
世界は見苦しいものばかり
目をつぶればいいかな
聞き苦しい音ばかり
耳を閉じればいいかしら
息苦しいことばかり
息を止めっぱなしにはできなくて
ぜえぜえと息を切らしながら
どたんと布団に転がった
「春が来るよ」

重苦しい雲が飛んで行き
北風もいつの間にか止んでいた
太陽は日ごとに元気を増して
天気の良い日が増えていく
春が来るよ春が来るよと
誰かの叫び声ささやき声
誰も口にしなくなる頃には
春はもうどっしりと腰を据えているよ



「川の情景」

はるかな空の向日より
飛んできたのはマガモの編隊。
ふわふわ羽毛の外套着こんで
びったりきれいな隊列組んで。
曇り空を背景に
川面に向けてまっすぐに。
河原の並木に挨拶しながら
川の水面に降り立った。
ようこそようこそ
歓迎するように水面が光る。
上手い上手いとはしゃぐようにススキが揺れる
にぎやかに賑やかになった川の風景。
一枚だけ、そっと写真の中に閉じ込めた。



作・赤富士文兼 挿絵・水口萌恵

障害のある人の権利を守る

北障連から

濱中博

□3 『学校づくり』の次は、卒業後の「働く場づくり」とそれを支える「地域づくり」だ！

1970年、第2回北部集会後に、与謝・丹後地域の1市10町のあった学校設置を促進してきた「手をつなぐ親の会」や「障害児を守る親の会」等の組織は、学校設立と同時に並行で、卒業後の働く場づくりや、地域の障害者問題に取り組み運動体として「北部障害者問題連絡会」(北障連)を結成させました。

北障連は以後50年に渡って京都北部の障害児者の権利を前進させる運動を牽引してきたと言えます。

しかしここで特筆すべきこ

とは、1市10町にあった親の会は、それぞれの地域で作業所づくりや、バザー、青年学級等の独自の活動を行ってきたと言うことです。

各地域の「守る親の会」と「北障連」運動・活動が車の両輪となり、丹後・与謝の共同作業所づくりの原動力となり、「よさのうみ福祉会」「あみの福祉会」「久美の浜福祉会」の認可施設づくりへと繋がりが、夢織りの郷・労働生活施設づくりへと発展しました。

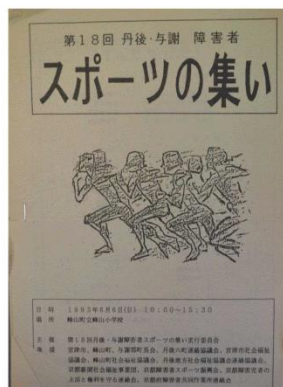
□4 仲間のスポーツと文化の発表・交流の場を作ろう！

同時に、卒業後の仲間のスポーツの交流の場、文化の交流の場を作ろうと「障害者スポーツの集い」や「障害者文化の集い」年が10数年に渡って開催されてきました。

※文化の集いは、仲間が主体的に参加する取組として「障害者と共につくる文化の集い」と名称変更され、歌や踊りの

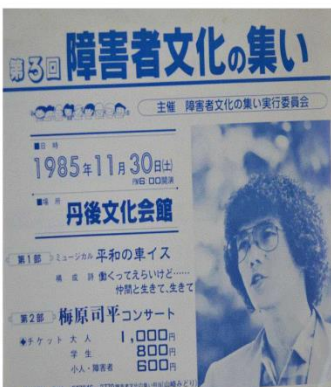
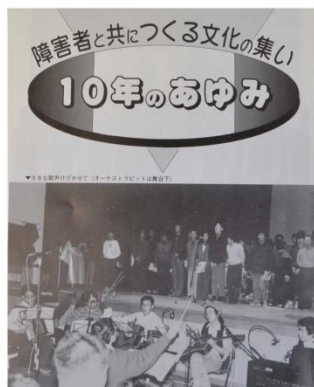
発表と作品展が宮津与謝と丹後で交互に開催されました。

これはどちらも地域小中の障害児学級や与謝の海養護学校も巻き込んだ一大イベントとなりました。しかし現在は、どちらの集いも休止しています。



しかし、仲間の交流の灯を

消してはならないと、意義を受け継ぎ「仲間の歓迎交流会」と形を変えて与謝・丹後の北障連に加盟している事業所が一同に集い、新しい仲間の紹介と交流を兼ねてスポーツを楽しむ場がもたれていきます。



365歩のマーチ



13 いれがせじいん...

4月になり、1歳児クラスに進級しました。まだ歩けないゆいちくんを抱っこして、満開の桜のもと「入園式」の看板の前で写真を撮ったのは1年前のこと。その時のゆいちくんは生後8か月。朝の分離の時に泣き、はいはいで園のなかを動き回っていた0歳児クラス、今や自分から父と離れて部屋に遊びに行き、父が「...ゆいちくん、ばいばい」と言うと「おー忘れてた」とでも言うかのように「ばいばい」と笑顔でタッチをしに来ます（母が送りの時には、別れを惜しむこともあるようです）。年度途中に母の時短勤務を解除し、父母ともにフルタイムで働くようになりました。朝の7時半（ほぼ100%の確率で一

番に登園）に預け、夕方は18時半（時折最後の一人になっていることも...）にお迎え。長い時間よくがんばってくれましたが、人が好きなゆいちくんは保育園生活を満喫しています。1年間があつという間に過ぎました。

朝の忙しい時間に「ゆいちくん、おきがえしよつか」と誘うと「いやーだ!!!」。「時間がなからごめん!」と言いながら着替えさせると裾を両手で握って脱げないようにして「いや、だー!」「ぶつぶ!ぶつぶー!」と服を脱ごうとしません。「今日も保育園、先生行くんやろ?」に「しえんしえー」と言いながら全力で抵抗します。おむつ替え、着替え、体温測定※を終え、やっと

*

「ものごとを勝手にすすめるな」とも言うように一つひとつ自分の思いをぶつけてきます。夜になると「お風呂に入りたくない」「寝たくない」などなど：一日の大半を「いやーだ」「ぶつぶー」と連呼しています。：これが世に言う「イヤイヤ期」か。人生のうちで、人に対してこんな「No」をはっきり言える時期はないのではないか。大きくなっても自分の意見を表明できる人になってね。あー大変!!!と思いつつも、これだけ自分の思いをたくさんぶつけてくることに感心します。た

※ボタンひとつでなんでもできて便利になってきている昨今。体温計を買う時に「おでこに当ててすぐに測れるものがないので」という母に、「なんでも「間がないのは...、まだかなあ」というもどかしさも大切では?」とほんとは水銀温度計でもよかつてけれども脇で測る電子体温計を購入することに。「元気かな?♪」と歌ったり、「終わったら保育園行こうねー」などと「待つに過ごします。が、言うは易し。実際やってみるとこの時期の10数秒はかなり長ーく感じます...」

の思いで玄関までたどり着くと「鍵を自分で閉めたい!」。エレベーターホールでは「ボタンを自分で押したい!」、1階につくと「保育園とは違う方向に行きたい!」。



替え、体温測定※を終え、やっと

「いやだ、つて言つて」まに、(父)「いやだ、つて言つて」に「いやーだ!」とゆいちくん。こんなところで「ぶつぶ、まだまだだだな」とほくそ笑む父です。

「いやだ、つて言つて」まに、(父)「いやだ、つて言つて」に「いやーだ!」とゆいちくん。こんなところで「ぶつぶ、まだまだだだな」とほくそ笑む父です。

「いやだ、つて言つて」まに、(父)「いやだ、つて言つて」に「いやーだ!」とゆいちくん。こんなところで「ぶつぶ、まだまだだだな」とほくそ笑む父です。

安藤 史郎 (あかひつねの園)

知っ得情報

青い鳥郵便葉書の無償配布

松本 美津男

日本郵便は、重度障害者の申し込みにより、青い鳥をデザインした封筒に通常葉書を20枚入れて無料で配布します。

- 1、配布の対象
重度の身体障害者（1級又は2級）と重度の知的障害者（療育手帳A）
- 2、受付期間
4月1日から5月31日まで
- 3、申し込み方法

近くの郵便局で身体障害者手帳又は療育手帳を提示し、「青い鳥郵便葉書配付申込書」に必要事項を記入のうえ提出（代理でも可）。

なお、「青い鳥郵便葉書配布申込書」と明記した適宜な用紙に、手帳の種類、手帳番号、級別又は程度、希望するはがきの種類、氏名、手帳の住所（配布先が違う場合はその住所も）、代理人の場合は代理人の氏名・続柄・住所を記入し、近くの郵便局宛に郵送しても良い。

- 4、問い合わせ先

お客様サービス相談センター

電話番号 0120-2328-86（無料）

携帯電話からは 0570-046-666（通話料有料）

（平日：8:00～21:00 土・日・休日：9:00～21:00）

あなたもぜひ 仲間に



サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ（資格不要）募集中
介護職員（資格要）募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります（随時）



あなたも支える存在に

京都市北区紫野東野町1-5
電話075-432-3636

命の平等をかけた、 無差別平等の医療と 福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介ください



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: info@kyoto-min-iren.org

ありがとうございます

年会費 関佳子

分担金 府立高教組盲学校分会

(敬称略・2021/4/10)



力を合わせて生きる (その2)

駅の無人化を巡る実情と課題

金順喜 (キン ジュンキ)

駅に駅員がないのを「無人駅」と言います。今回は駅の無人化を巡る実情と課題について書きたいと思います。

日本自立生活センター (JCIL) がある最寄り駅の「近鉄十条駅」も本年2月より、AM9時40分頃～PM18時00分頃までの時間帯は駅員が常駐しています。(それ以外は駅員がないため) 事実上毎回事前連絡をしないと駅利用がしづらくなりました。これまでに私たちは事実確認のためや交渉するため管轄する「近鉄京都駅」と十条駅の無人化について話し合いを行いました。毎日近鉄を利用する人の声が届くよう窮状を訴えましたが実情は無人駅のままです。もはや「近鉄」、「京阪」、「JR」という事業者だけに異議を唱えるだけでは解決は出来ないのは明白です。新聞によると「無人駅」は全国の駅の約5割にのぼっているからです。言いたいのは、「駅利用にさほど困らない健常者も、体調の急変で介抱が必要になることもあるでしょうが車いすでなくても誰かの力を借りなくては駅利用が出来ない障害者とはその影響はまるで違う。もしスロープがなかったら、「介助する側」も「障害者」も「障害者」が一人なら転倒し怪我をしてしまう、死んでしまうと考えたら鉄道利用を控えてしまう。駅員さんがいなくても、健常者と同じように、車いすでも一人で電車に乗れるような仕組みが出来たらと考えるのです。

例えば、ホームと車両の隙間を埋める。くしがたゴムにするなど。改善策は無数にあるはず。長期化する新型コロナウイルス過で人々の移動自粛があり乗客が減り営業悪化から経営難もあるでしょう！

それでも駅の無人化はある特定の人の問題ではないはず。わがまを言ってるのでもありません。

これって、「公平ですか？」